

21世紀COEプログラム 平成16年度採択拠点中間評価結果

機関名	二松学舎大学	拠点番号	K25
申請分野	K<革新的な学術分野>		
拠点プログラム名称 (英訳名)	日本漢文学研究の世界的拠点の構築 Establishment of Organization for Kanbun Studies		
研究分野及びキーワード	<研究分野:文学>(比較文学)(国文学)(中国文学)(歴史学)(書誌学)		
専攻等名	文学研究科中国学専攻・文学研究科国文学専攻・東アジア学術総合研究所		
事業推進担当者	(拠点リーダー名) 高山 節也 他18名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成18年4月現在）を抜粋

<本拠点がカバーする学術分野について>

本プログラムが対象とする日本漢文学は、日本漢詩文等の文学ジャンルに限定されたものではなく、日本独自の訓読法を基礎とする漢字漢文文献、及びそれらを媒体とする学問すべてを対象とする。つまり、日本の近代以前の学術文化全領域をカバーする日本学に他ならない。また日本漢文は、その流通の過程から中国・朝鮮との交流・比較研究が不可欠なため、中国学や朝鮮学等の学際的な分野をも含む。

<本拠点の目的>

上記の認識にたつて、従来は日本文学研究の一部門とのみ考えられがちであった日本漢文学研究を、日本学研究そのものとして広く総合的視野からとらえ直すこと、及び中国学・朝鮮学との関連を重視して、東アジア学術文化研究の一つとして位置づけることによって、日本漢文学研究の学際的・国際的研究体制の構築を目指す。

<計画・当初目的に対する進捗状況等>

当プログラムの推進については、当初から4本の柱となる計画を基本におき、さらに個々の個別研究を班単位で推進する方法をとった。個々の柱に即していえば、日本漢文学関連データベースについては、入力機構の構築を終え情報の公開のために資料入力に取りかかっている。日本漢文学研究者の世界的ネットワークについては、シンポジウムの開催や海外における研究会等への参加により、着実にネットワークを構築しつつある。若手研究者及び書誌専門技能者の養成については、講習会や公開講演の開催、大学院科目の設定など教育体制を整えて受講生を受け入れている。漢文教育の研究と振興については、各種の漢文テキストの編集を中心として、それによる授業実践も開始された。

<本拠点の特色>

日本漢文は、表現様式は中国語の漢字漢語、解読法は日本語の訓読法、内容は中国人と日本人の著述(または朝鮮半島の漢字漢文文献をも含む)という二面性または多面性を有するために、これまで日本学・中国学のいずれからも敬遠されがちな分野であった。しかしこの二面性(多面性)こそ、日本の学術文化の特質といえるものである。本プログラムはここに焦点をあて、日本学系諸学問と中国学・東洋学系諸学問との連携をはかり、世界的な研究者ネットワークの構築と研究情報の発信を最大の特色とする。

<本拠点のCOEとしての重要性・発展性>

本プログラムは、近年の我が国における漢文文化の衰頹と、一方海外における日本研究の高まりの中で、我が国の文化・伝統の研究や発掘に重点を置きつつ、世界的規模での日本漢文学研究を確立して、その特異性や歴史的役割を解明するという意義をもつ。その成果として、世界的レベルでの文献収集とデータベース化、日本漢文学研究者の連携と若手研究者・専門技能者の増加、さらには新たな研究分野の開拓等の実現が、十分期待できる。

<本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果>

- ・日本漢文文献にかかわる情報及び研究拠点の確立
- ・世界的規模の共同研究及び情報交換等の活発化及び恒常化
- ・若手研究者及び書誌専門技能者の増加
- ・院生、学生等における漢字漢文文献の読解力と研究能力の増強

<本拠点における学術的・社会的意義等>

我が国の学術文化・伝統の研究や発掘を世界的規模で実施し、日本学の新局面を創出すると同時に、中国や朝鮮等東アジアの学術文化との関連において、我が国の学術文化・伝統の特異性や歴史的役割を解明するという比較文化学・文化人類学的意義を有する。伝統文化の再評価によって、敬遠されてきた日本漢文資料が日本文化研究の重要資料であることを再び認識し、さらには現代文明のかかえる多様な社会問題への自覚を促し、漢字文化が軽視され、漢字漢語の読解力や表現力が著しく低下している我が国の状況を改善するという積極的意義をも持つ。

◇21世紀COEプログラム委員会における所見

(総括評価)

当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

日本漢文学を日本学の中に位置づけ、日本文化、なかでも日本文学の学問的理解のために必須のものとする趣旨は大いに評価する。日本読書人文化の基礎中の基礎としての漢文学を再評価し、発展させる研究拠点形成としての、本計画の意味はどれほど強調しても足りないほどに大きい。これに応えた、二松学舎大学側のこれまでの江戸期漢文のデータベースをはじめとする膨大な努力は、漢文学拠点形成にふさわしいものである。

しかし、世界的拠点の内容、意義は依然として不明確である。たとえば世界で発展している日本学、日本文学研究のほとんどは、夏目漱石、芥川龍之介、川端康成であるが、漢文に関する深い知識を具有しないかぎり、これらの作品への学問的アプローチは難しい。世界の日本学研究者に漢文訓読法の重要性を訴えるべきであり、日本漢文の意味についての英文論考が用意されるべきである。

またデータベースの国際化が必要である。このためには、索引を英語でも利用できる機能をつけるべきである。漢文の英語化に意味があるとは思えないが、漢文研究のイントロダクションを英語化することは意味がある。研究活動全体に従来の二松学舎大学の方法が深化していることは大いに評価できる。しかし、内外の人的なコネクションにも広がりが見られず、たこつぼ的な研究の弊害が乗り越えられるには至っていない。学内外への積極的な発信、また学内外の人材の研究拠点への取り込みが必要である。